

# ☆2023年度部会活動貢献賞☆ (部会CT賞) The Award for Distinguished Service to SCEJ Divisional Activity

[部会CT賞表彰にあたって] (福原長寿 部会CT長)

化学工学会では、基盤技術分野として6部会および展開技術部会として8部会がそれぞれ横系および縦系として各学問分野での専門家集団を形成し、その分野の学会代表として積極的な活動を行っています。また、国際的にも我が国の研究者集団の代表として国際シンポジウムの開催を行う等、積極的に寄与しています。このような部会活動は部会員の皆様の努力によって支えられていますが、特に若手会員の不断の貢献に因るところが大です。この貢献に少しでも報いるべく2010年度より部会活動貢献賞として部会CT賞が設けられました。貢献された個人のみならずグループも表彰の対象となります。本年度は14回目の表彰となり、企画、運営等の部会活動の活性化に大きく貢献された以下の2件(1名、1分科会)を受賞者として選定しました。

受賞者の表彰は、2024年3月にオンライン・オンサイト併用開催されました第89年会初日の式典にて行いました。受賞者のこれまでの献身的な貢献に感謝するとともに、今後も部会をはじめ化学工学会の諸活動に御支援賜りたく、ここにお願ひ申し上げる次第です。

最後に、この度受賞されました方に、心よりお祝いを申し上げます。

---

## 超臨界流体部会における部会活動の企画、運営と 活性化への顕著な貢献

---

### 材料・合成分科会

---

#### 【超臨界流体部会】

---

超臨界流体部会では、2014年度に、材料・合成分科会、基礎物性分科会、エネルギー分科会及びバイオマス・天然化合物分科会の新たな4つの分科会が編成され、笹居高明氏と百瀬健氏はこの分科会の1つである「材料・合成分科会」に発足当初の2014年から分科会リーダーとして、分科会の起ち上げとその後の運営に尽力しています。笹居氏は2014年度から2016年度まで副分科会長、2017年度から現在まで分科会会長を務めており、百瀬氏は2014年度から現在に至るまで副分科会長を務めています。また、両氏は2014年度から現在に至るまで超臨界流体部会の幹事も務めており、分科会活動のみならず、部会活動全般にわたる企画、運営と活性化への顕著な貢献を行っています。

笹居氏と百瀬氏を中心とした材料・合成分科会は、これまでに2015、2019および2023年度の超臨界流体部会サマースクールの

企画・運営を行い、日時・場所の設定、講演内容ならびに講師の選定といった企画運営の全般を担われました。2015年8月10日～11日に開催された第14回サマースクール(船橋市)では、「超臨界流体を利用した材料・合成技術－物性の把握から材料設計・評価まで－」と題して、講演内容及び講師の選定において、超臨界流体を利用した材料・合成技術に関する講演に加えて、超臨界流体系の基礎物性や超臨界流体を利用した分析などの幅広い分野の研究に関する講演を企画されました。さらに、若手研究者に研究戦略や今後の研究指針を紹介してもらい、先達からのアドバイスによる若手研究者の一層の活性化、ならびに学生をはじめとした後進が研究を進める上で参考となる情報交流会を取り入れる新しい試みを企画発案し、若手研究者や学生の研究の活性化や人材交流に対して顕著な功績を残しました。2019年7月25日～26日に開催された第18回サマースクール(仙台市)では、「超臨界流体×材料・合成技術の融合」と題して、超臨界流体と電気化学の融合、超臨界流体と表面処理の融合、超臨界流体と新領域への挑戦、ならびに超臨界流体と高分子材料というこれまでに超臨界流体部会主催でのシンポジウムやセッションにおいて、講演されていない研究に関する講演を企画され、部会活動の広い展開、深化ならびに他学会等との連携に対して大きな貢献を行いました。2023年8月23日～24日に開催された第22回サマースクール(秋田県山本郡藤里町)では、これまでのサマースクールの実施形態や趣旨を大きく変え、「地域を活かす超臨界流体技術」と題して、地域、特に東北地区での超臨界・高圧流体技術の研究を紹介する機会を設けるだけでなく、化粧品の量産に使われている超臨界抽出技術についてアルピオン白神研究所を見学して実用化の現場の取り組みを理解する機会を提供しました。これにより、超臨界流体技術をSDGsに資する形で実用化するダイナミズムを理解するという部会活動の一層の発展に貢献されました。さらに、本サマースクールでは、併催として小規模な国際会議である「国際的超臨界活動推進企画－台湾・韓国における超臨界流体技術活用の現状－」を新たに企画立案・運営されました。ここでは、韓国・台湾における超臨界流体技術のキーパーソンを講師としてお招きして、対面で議論するという非常に貴重な場を企画していただいたことにより、東アジアでの超臨界流体技術の現状を共有し、今後の部会活動における韓国・台湾との交流のきっかけを作るといった部会活動への多大な貢献をされました。現在、超臨界流体部会では、国際連携や国内連携の専任幹事を新設するといった、日本のみならず国際的な関連学会・研究会等との連携を強く意識した部会の活性化を図っています。

笹居氏と百瀬氏が企画したこれまでのサマースクールでの企画を通じて、化学工学会だけでなく我が国の他の学会・研究会との連携が強化されるだけでなく、超臨界流体技術に携わる多くの研究者との国際的な連携が強化されるものと期待できます。

また、2017年9月20日～22日に開催された化学工学会第49回秋季大会(名古屋大学)および2021年9月22日～24日に開催され

た化学工学会第52回秋季大会（岡山大学，オンサイト・オンライン併用開催）の超臨界流体部会シンポジウムを企画・運営し，シンポジウムの趣旨，講演内容ならびに展望講演，招待講演，依頼講演等の講師の選定といった企画運営の全般を担われました。特に，化学工学会第52回秋季大会でのシンポジウムでは，超臨界流体部会の節目である20周年記念シンポジウムとして，「日本の超臨界流体技術－これまでの20年とこれから－」を企画・運営し，超臨界流体部会を長年支えてこられた4名の著名な研究者の招待講演により超臨界流体部会20年の歩みを振り返るとともに，亜臨界・超臨界流体の物性などの基礎から，亜臨界・超臨界流体の環境，エネルギー，材料分野等への応用までの幅広い視点での最新の研究成果について，5件の若手研究者による依頼講演などを基に活発に議論する場を提供し，部会活動の節目を飾るだけでなく，幅広い年齢層や分野・職種の部会員が部会の歴史と意義を再認識し，今後の発展や展開に繋がるものとしています。本学会はCOVID-19による行動制限下において開催されたため，オンサイト・オンライン併用開催という難しい運営であったにもかかわらず，積極かつ効率的にオンラインを活用してシンポジウムの成功に導くことに尽力されました。

さらに，筈居氏は2016年，百瀬氏は2018年の化学工学誌10号の第9章9.3節材料・合成の執筆委員を担当し，本部会活動の関連資料の取り纏めに貢献されました。

以上のように，両氏が34歳の2014年度から現在（43歳）に至るまで，筈居氏と百瀬氏は超臨界流体部会における部会活動の企画，運営と活性化への顕著な貢献があり，今後の更なる部会活性化への貢献が大いに期待されます。

以上の理由により，部会CT賞の受賞に相応しいと認められました。



右：百瀬 健 氏  
中央：筈居 高明 氏  
左：福原 長寿 部会CT長

## エネルギー部会活動の活性化及び部会活動の効率化への顕著な貢献

石飛 宏和 氏(群馬大学)

### 【エネルギー部会】

石飛宏和氏は2008年の化学工学会入会以来，エネルギー部会の若手メンバーの一人として部会活動に積極的かつ献身的に尽くされ，部会の活性化に大きな役割を果たされました。

まず，2018年に鹿児島大学で開催された第50回秋季大会では材料・界面部会や反応工学部会と共催した部会横断シンポジウム「電池・エネルギー変換・貯蔵技術の新展開－ナノからマクロ，材料からシステムまで－」のオーガナイザーとして，主にポスターセッションの運営を主体的に行い，39件の学生ポスターに対する表彰審査プロセスを円滑に運営し，部会の活性化に尽力されました。このポスターセッションは当時学生表彰を出しているシンポジウムは限られていたこともあり，部会関係の学生の研究モチベーションを上げるものとなりました。また，2019年に開催された国際会議International Symposium on Innovative Materials for Processes in Energy System 2019 (IMPRES 2019) は約200名の参加者があったエネルギーシステム・プロセスに用いる材料に関する国際会議ですが，石飛氏は実行委員としてアブストラクトの審査，パンケット（参加者数約130名）の司会（英語），論文特集号の編集で尽力され，国際会議の成功を支えました。この国際会議の開催と運営への貢献に対して，辻口氏，大坂氏の両名に既に部会CT賞（2021年度）が贈られています，石飛氏の貢献も大きなものでした。一方，石飛氏は2019年度～2020年度に材料・界面部会の部会事務局担当に就任しており，その際もエネルギー部会，材料・界面部会，反応工学部会で共催する秋季大会における部会横断シンポジウムの運営をサポートするなど部会間連携に注力されました。材料・界面部会の若手討論会である材料化学システム工学討論会の幹事（2020年～2022年）に就任し，関連するエネルギー部会及び反応工学部会にも広報を行い，反応工学部会側の講演者を招待するなど部会間の若手研究者交流に尽力されました。

石飛氏の貢献で特に大きなものは，2021年度～2022年度のエネルギー部会庶務幹事としての活動です。当初，部会員数約500名の大所帯のエネルギー部会は，部会の中の情報の伝達や共有化が必ずしもスムーズに行われておりませんでした。さらにコロナ禍によって活動が制限されたこともあり，部会としての活力が見えにくくなりつつありました。このような状況の中，石飛氏は庶務幹事として，部会ウェブサイト再構築・更新してインターネットを活用した情報発信を行い，会計処理をオンライン化し，部会活動の企画や主催・共催・協賛行事の報告に関してオンラインフォームを作成し，部会総会や部会幹事会をオンラインで開催して会議資料をオンライン掲載するなどデジタル化を推進して部会

の中の情報伝達方法の再構築と効率化を図り、部会活力の維持、向上に尽力されました。また、部会賛助会員（部会法人会員）に対して積極的に連絡・広報を行い、部会活動における産学交流を活性化しました。さらに、エネルギー部会では初めての企画となる第1回エネルギー部会シンポジウム（2023年1月19日に開催）に庶務幹事として企画、運営に携わり、対面とオンライン配信のハイブリットの開催となる中、ウェブサイト構築し、現地会場（東京大学武田ホール）の下見やオンライン配信（Zoom）の準備、化学工学会法人会員への広報、会計処理に献身的に尽されました。その結果、有料のシンポジウムとしては多数と言える産側57名・学側33名、計90名の参加者を得、シンポジウムを成功に導きました。参加者からは「非常に有益な内容だった。」「非常に興味深かったので、ぜひこういった企画を続けていただけたら希望いたします。」等多くの好意的な意見をいただきました。このように部会の活動を内外に示すことに尽力し、部会の活性化に大きく貢献されました。

石飛氏は現在もエネルギー部会エネルギー変換デバイス・システム分科会の幹事として分科会活動に携わっておられ、今後益々の活躍が期待されます。

以上のように同氏はエネルギー部会活動に献身的に尽力されました。

以上の理由により、部会CT賞の受賞に相応しいと認められました。



右：石飛 宏和 氏  
左：福原 長寿 部会CT長

（静岡大学 福原長寿）